

『新斎夜語』第八話と源氏注釈書

木越 俊介 (国文学研究資料館准教授)

去る昨年12月14日、当館内で開催された第44回国文研フォーラムにおいて、『新斎夜語』第八話と源氏注釈書と題する発表を行った。以下、誌面をかりて、そこで扱った作品の紹介を中心にその一端を報告する次第である。

『新斎夜語』は五巻五冊、全九話からなる短編集で、安永四年(1775)に大坂の書肆を主板元として板行されている(刊記は図版参照)。

作者は梅臈館主人であるが、これは江戸の幕臣・三橋成烈(1726-1791)の号で、冷泉為村・為泰門下の歌人でもある。大田南畝とも接点があり(久保田啓一「大田南畝と江戸歌壇」1987)、大坂在番として頻繁に江戸と大坂を往復し、最後を迎えたのも大坂の地であったらしい。また、彼は幕臣仲間と「飛檄会」という知識人グループを組んでおり、大坂滞在中は江戸の仲間と書簡のやりとりを行っていた(市古夏生「梅臈館主人と飛檄連中―『飛檄』『飛檄随筆』を通して―」2004)。

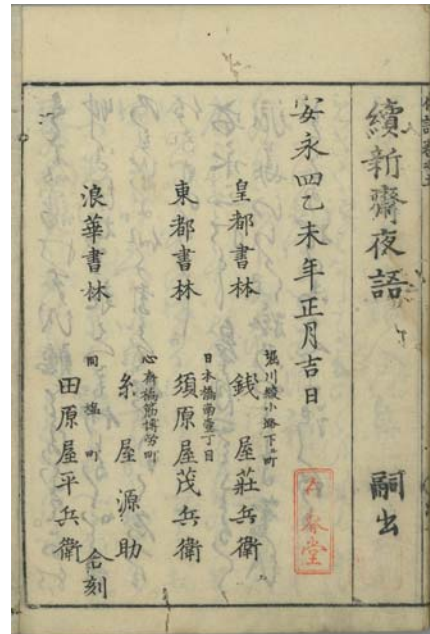
さて、この『新斎夜語』は、板行時期や内容などから、前期読本に位置づけられるものの、談義本との関わりも認められる(徳田武『『新斎夜語』と談義本』1974)。参考までに目次を引いておくが、以下の3、7を除く七話までもが対話形式の議論を含む点に特色がある。

- 1 北野の社僧昭君の詩を難ず
- 2 渡辺満綱古今の射法を弁ず
- 3 小西氏の処女天遇の嫁をなす
- 4 売茶翁数寄の正道を語る
- 5 岐阜の老尼出離の縁を明す
- 6 戸田茂睡つれづれ草を読む
- 7 室の妓女松風が任侠幸を迎ふ
- 8 嵯峨の隠士三光院殿を語る
- 9 鍛冶国助家業に託して士を諷す

近年、飯倉洋一「上方の「奇談」書と寓言―『垣根草』第四話に即して―」(2004)が本作を「学説寓言」の一つとして位置づけ、改めて注目が集まっている。「学説寓言」とは、「飯倉の造語で、いわゆる寓言的手法を用いる読物の中でも、古典にかかわる学説を登場人物が述べるもの」(飯倉「王昭君詩と大石良雄―『新斎夜語』第一話の「名利」説をめぐって―」2015)であり、当時の学問の進展を背景に議論が行われるものが多い。とりわけ『新斎夜語』にはこの傾向が顕著なのだが、今回は、第八話「嵯峨の隠士三光院殿を



国文研蔵『新斎夜語』表紙



『新斎夜語』刊記

を語り」と取りあげ、そこに盛り込まれる『源氏物語』ならびにその注釈をめぐる議論に焦点をあて、本話は何を、どのような手法で描いているのかを明らかにすることを試みた(なお、今回は触れないが、本話の続編にあたる「三光院殿再嵯峨の草廬を訪玉ふ」が安永八年板『続新斎夜語』巻四に収められる)。

本話の概要は以下のとおり。

* * *

三条西実澄(三光院、実枝とも)は、歌文の才に秀で父祖(祖父・実隆、父・公条)の学を継承し、『源氏物語』の注釈(『明星抄』)を著し、その名を高めていた。いまは官を辞し出家し、嵯峨周辺の『源氏』をはじめとする古典ゆかりの地などを訪れることを楽しみとしていた。

その日も嵐山周辺を散策していた三光院は、愛宕神社一の鳥居から桂川方面へと向かう途上山路に疲れ、傍らの草庵にしばしの休息を求める。そこには七十ほどの隠士が『源氏物語』を読んでおり、山間にて『源氏』を繰り返して懸命に読んでいと語る。これに感じた三光院は自らの素性を隠士に明かし、必要があれば本を貸すことなどを約す。

感謝しながらも隠士は、かねてから『源氏物語』についていくつか疑問点があると、三光院に三つの質問をする。そのいずれにも、諸注釈に基づき穏当に答える三光院に対し、隠士は不満の色を隠さない。三光院に促された隠士は、先の三点について自説を開陳するのだが、三光院はことごとく珍説であると閉口し、「鑿説」として堂上方では採らないと、やんわりと退ける。

これに対し隠士は、むしろ公家で行われている三箇の大事などの伝授の方が「鑿説」ではないかと反論し、もし上に位置する者が下の者の意見に耳を貸さなければ、政道を乱すだろうと、話は堂上批判にまで及び、三光院は冷や汗をかきながらその場を退いたのだった。

* * *

本話の軸となる人物、三光院(1511-1579)は、江戸時代には源氏注釈書の一つ『明星抄』の著者として認識されており(近年に至るまでそのように考えられていた)、本話もそれを前提として描かれている。

内容的には、『源氏物語』に関する以下の問答がなされるのだが、それらは、①桐壺巻冒頭部「いづれの御時にか」について、②紅葉賀巻の、藤壺との子を目のあたりにした光源氏を描く場面における「も」の対句的表現について、③いわゆる紫式部の石山寺起筆説をめぐって、の三点である。

たとえば、①については「伊勢集に(いづれの御時にかありけん。大御息所おはします)と書出せる筆法」として従来の説(諸注)を踏襲する三光院に対し、隠士は「長恨歌の発句に唐の玄宗の事を、(かんくほうをもんじていろを)と書るより出るものならん」と捉える。

②では、三光院は「(しつたり かんたり かくたり けんたり)といへる、毛詩の語勢にも似たる」と『細流抄』などの説を引いて説明するが、隠士は、

是は源氏の御心のうちに、みづからの御身のうへのおそろしく、御門の御事をかたじけなく、冷泉院の生れ給へるをうれしく、藤壺の御心を(おぼ)を思しやればあはれるを、かく色々に思ひ給ふ、(も)の字四つにてあるべし。

と、表現にこめられた意味を、前後の文脈を踏まえて解釈するのである。

③については説明が長いので作品そのものにつかれないが、なかなかユニークな説であることは間違いない。

作中「鑿説」とされ、隠士自身も「頑なるかうがへ」と述べているこれらの説は、おそらく作者・成烈の自説であったと思われる。

『新斎夜語』には、他の話にも『源氏物語』の話題が出てくるが、それを含めた作者・成烈の『源氏』観をたどっていくと、意外にも『明星抄』からの影響が認められるようである(ここではその検証過程など詳細は略す)。本話の主たるテーマは、概要に記したようにある程度分かりやすいのであるが、一方でこうした点に、本話がなかなか一筋縄ではいかない

側面を有するを感じさせる。

その作品の主題に関わることとしていえば、冷泉門下の成烈が作中に堂上批判を記すことをどう考えるのか、という問題がある。この点については、揖斐高「幕臣歌人における堂上と古学」(1989)が参考になりそうである。ここでは、成烈と同じく冷泉門下で交流もあった、有力幕臣歌人・石野広通『大沢随筆』の記事に基づき、伝授の弊害を説いたり、堂上歌壇の体質を批判的に捉えたりする広通のまなざしが指摘されており、成烈の視点を考える上で多くの示唆を与えてくれる。

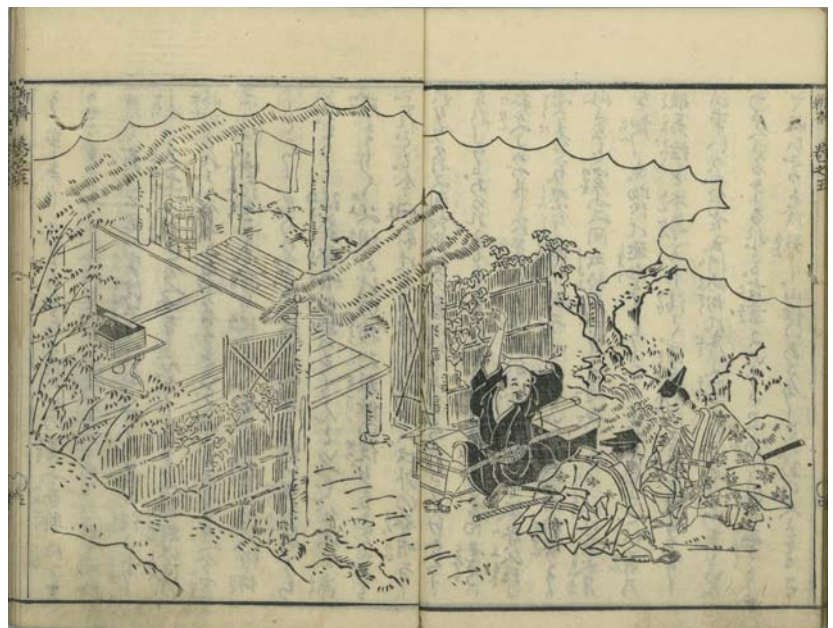
また、本話をよく読むと、汗牛充棟の本(諸注釈類)を参照しながら『源氏』を読む三光院と、一人静かに、何度も何度も繰り返し『源氏』の本文を読む隠士、という姿が対照的に描かれており、これも一つのサブテーマとなっていると思われる。

* * *

フォーラムを通して課題も多く見えた。とりわけ、冷泉歌壇の中での『源氏』受容の問題など、当時の時代相の中でいまいちど作品を捉え直す必要性を感じた。

なお、フォーラム後の成果をも盛り込み、活字としてまとめたものを、鈴木健一編『近世の学問と文藝世界(仮)』(森話社、今秋刊行予定)に寄稿しているので、ひとえにご校正を乞う次第である。

また、近日刊行予定の、「江戸怪談文芸名作選」第2巻『前期読本怪談集』(飯倉洋一校訂代表、国書刊行会)に正統『新斎夜語』が活字翻刻される予定であることを書き添えておく。



『新斎夜語』第八話挿絵